

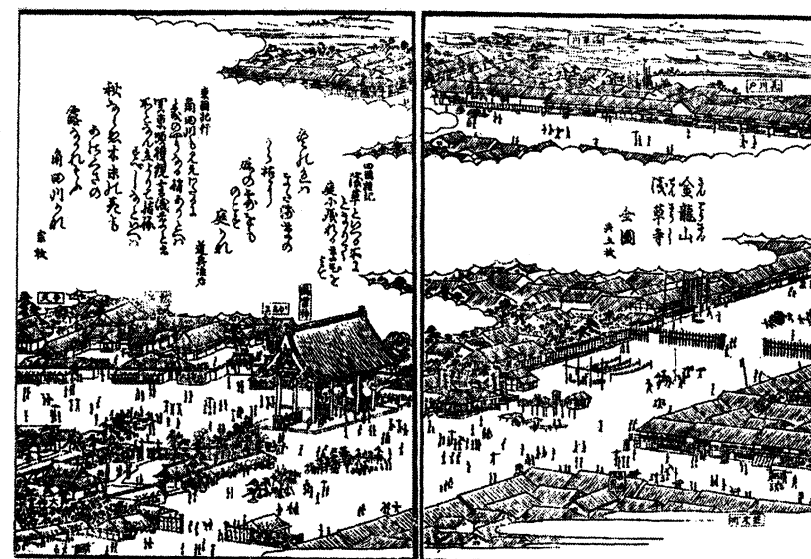
次の文章をよく読んで、7ページから9ページの問いに答えなさい。

君たちの多くは、旅行に行ったことがあると思います。国内はもちろん、海外旅行を経験した人もいるでしょう。一方、君たちは自分が生活している街で、外国人観光客やほかの地方からやってきた修学旅行の団を見かけたことがあるかもしれません。このように旅行については、ある場所を訪^{おとず}れて見る側になる場合と、旅行者を受け入れて見られる側になる場合とがあるわけです。この見る側と見られる側、見る者と見られる者との関係を頭におきながら、これから旅行について考えてみることにしましょう。

現在、人びとは生活に少しゆとりができたときに楽しみとして旅行をします。そうした意味での旅行が行われるようになったのは日本では江戸時代からです。もちろん、ア. 飛鳥時代から室町時代までの日本でも、貴族や武士のように朝廷や幕府の命令で、長い距離を移動した人びとがいました。しかし、その様子は江戸時代以降の旅行とはだいぶ違っていたはずで

江戸時代には、かなり早い時期から、いまの旅行ガイドブックにあたる書物が数多く出版され人びとに読まれていました。一般には「名所図会」とよばれ、絵と文章を使って各地の名所を紹^{しょうかい}介しているところは、ほとんど現在のガイドブックと同じです。下の図はその例ですが、このような江戸や京都などの各都市の見物客向けの名所案内からはじまって、イ. その内容も読み手の関心に応じてさまざまなものが出版されるようになります。

「名所図会」 浅草

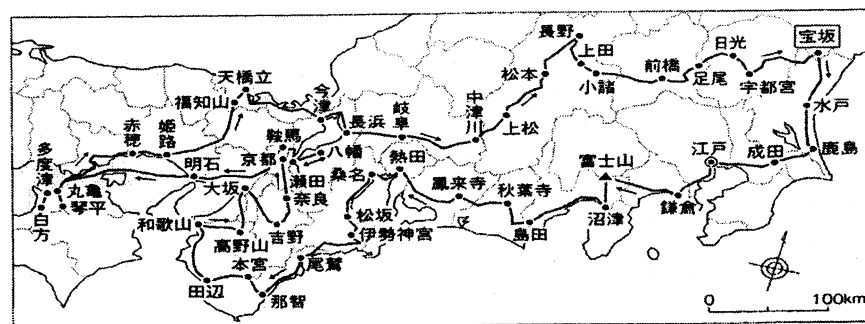


これは、この時代の人びとの旅行やよその土地に対する関心の高さを示していますが、そうしたなかで当時のガイドブックのあり方に反発して出版されたといってもよい書物があります。鈴木牧之^{ぼくし}という人が江戸時代の後半に著^{あらかわ}した『北越雪譜^{ほくえつせつぷ}』です。鈴木牧之は、いまの新潟県南魚沼市^{にいがたみなみうおぬま}の出身ですが、この豪雪地帯を故郷にもつ彼からみると、江戸などで売られていた「北越」についての書物が伝える雪国の情報には、文章にも絵にも誤りが多かったのです。それはそうした書物を書いた人のほとんどが雪の季節を避けてこの土地を旅行したからなのですが、そのことを残念に思った鈴木牧之は、ウ. 雪国に生きる人びとの生活や文化を事細かく紹介する書物を著したのです。そこには雪国の大変さばかりではなく、雪国だからこその喜びや楽しみも描かれています。

ある土地についての情報がガイドブックなどによって誤って伝えられ、それが真実であるかのように人びとに思われ、語られるようになる。そうしていったんひとつのイメージができあがると、そこを訪れる旅行者は、そのイメージからしかその土地を見ようとしなくなる。鈴木牧之はそうしたことに我慢できなかったのかもしれませんが、ここには見る者と見られる者との関係をめぐる旅行の問題があります。

ここで、江戸時代の旅行の様子を見ておきましょう。当時の人びとの旅行の記録はたくさん残されていますが、そのひとつに東北地方の農民たちの旅行記である『源蔵・郡蔵日記^{げんざうぐんざう}』があります。これは江戸時代なごころのものです。このころになると、農民たちのなかでも生活にゆとりを持ちはじめた者が見物や遊びで旅行にでるようになります。幕府は農民が寺や神社にお参りするために旅行することは許可していましたから、源蔵たちの旅行も表向きは伊勢神宮への参拝が目的でした。いまの福島県南部に位置する宝坂を出発した彼らは、伊勢神宮からさらに足を西にのぼして京都、大坂から琴平^{ことひら}、大橋立^{あまのはしだて}まで見物しています。エ. 下の地図がそのときの旅行経路です。当然、途中の江戸や日光も見物していますから大変な旅行です。とても信仰心からの旅行とは思えません。むしろ彼らは、お参りにかこつけて自分たちの好奇心を満足させる旅行をしていたのでしょう。

『源蔵・郡蔵日記』より作成した旅行経路



農民や町人たちは伊勢神宮などへの参拝のために自分たちが住む村や町でグループをつくり、そのグループで毎月お金を積み立てていました。旅行に出る者をくじ引きで決め、つぎのくじ引きではすでに旅行に行った者はのぞくという方法です。グループに入ればだれもが一度は旅行に行けるなかなかうまい方法です。このグループを「伊勢講」とか、たんに「講」とよびますが、旅行のほとんどは、村や町など自分たちが暮らす土地との結びつきの強い講を足場にして行われていました。その講を離れた旅行など考えられなかったといってもよいでしょう。当時の旅行は、自分たちが生活する土地を足場にして、そのメンバーたちと一緒に旅行する団体旅行だったのです。旅行に制限のあったこの時代でも、人びとはさまざまな工夫をして自分たちの見たいものを見ようとしていたことがわかります。

明治時代になると、旅行をめぐる事情には大きな変化が起こります。外国から観光客がやってきて日本が見られる側に立ったのです。1869 (明治2) 年、地中海とインド洋をつなぐ《あ》運河が開かれ、北アメリカ大陸に大陸横断鉄道が開通します。これによってヨーロッパの貴族やお金持ちの間では世界一周旅行が流行するようになります。明治維新直後の日本はこの観光コースに加えられます。オ. 明治政府は見られる立場を強く意識してその対策に苦心します。この当時、日本は外国人観光客を受け入れる側、見られる側にいたのです。それが20世紀に入ると、観光する側、見る側にまわる機会が生まれてきます。それは海外に植民地をもったことをきっかけにしています。

すでに行われていた修学旅行も、その影響を強く受けることになります。たとえば1905 (明治38) 年に出版された『学生必携・修学旅行案内^{ひつがい}』という本を見ると、直前の《い》戦争で戦場だった旅順^{りょじゆん}などへの修学旅行をさかんにすすめる文章ののっています。同じ時期、いくつかの新聞も、修学旅行の行き先として「満州」(現在の中国東北部)や朝鮮半島を強くすすめる記事を掲載していて、実際にこれ以降、中学生や高校生の満州や朝鮮半島への修学旅行が流行するようになります。もちろん、こうした修学旅行が、文部省(現在の文部科学省)だけでなく、軍隊などの積極的な協力や援助に支えられていたことはいうまでもありません。ここには旅行する側とそれを受け入れる側、見る者と見られる者の関係以外に、カ. 見させようとする者の意図が強く働いているといえます。

ところで、第2次世界大戦後、旅行の様子はどのように変化してきたのでしょうか。戦後つくられた日本国憲法は、居住移転の自由を保障し、それが、キ. 移動の自由や海外旅行をふくむ旅行の自由の根拠となっています。しかし、こうした個人の権利が憲法に明記されたからといって、すぐに人びとが自由に旅行するようになったわけではありません。旅行をする、まして個人で旅行をするとなると、それなりの経済的な豊かさが必要ですが、

それは戦後すぐには望めなかったのです。

具体的には、1960年代の末ごろまで、会社の社員旅行や農協の企画する旅行などが日本の旅行の半分以上をしめていたのです。これらはいずれも団体旅行です。社員旅行は、年に1回か2回、社員同士の親睦や骨休めを目的に職場で企画されました。また、農村では、地域の婦人会を中心とした旅行が目立つようになったといわれます。これには、戦後まもなく女性の参政権が認められたことや、全国の農村で《う》が実施されたことが関係しています。旅行先としては、いずれも美しい風景で有名な観光地や温泉地が選ばれていました。いまとくらべ宿泊をとまなう旅行をする機会のずっと少なかった当時の日本では、自分が属している職場や地域を足場にした仲間同士の団体旅行を心待ちにしていた人たちが多くいたのです。

ところが、1970年代に入る前後から、旅行の様子が少しずつ変わり始めます。それまでの旅行の形や目的地では満足しなくなった人たちの新しい動きがその背景にはあります。この時期から旅行会社が売り出したものにパッケージ旅行（パック旅行ともいう）があります。それまでの団体旅行の形を少し変えたパッケージ旅行は、旅行会社が旅行プランをつくり参加者を募集する形で行われます。見ず知らずの人たちが、個人や家族あるいは友人たちそれぞれで応募して団体をつくるわけです。ク. 自分の行きたいコースを選ぶことができたり、旅行会社の人が同行していろいろ世話をしてくれるなどの利点があります。

このパッケージ旅行は、国内・海外を問わず現在でも人気のある旅行の形ですが、そうした選抜肢も人びとの前に用意されるようになったわけです。

そして、さらに新しい旅行の形が登場するようになります。1970（昭和45）年に大阪で行われた《え》では、家族や友人同士での入場者が目立ったといわれます。このころから団体旅行は減りはじめます。こうした動きに旅行に関係する会社は敏感に反応しました。たとえば、国鉄（現在のJR各社）は1971（昭和46）年に「ディスカバー・ジャパン（DISCOVER JAPAN）」という標語で大規模な観光旅行の宣伝を始めます。右のポスターは、国鉄が当時宣伝用につくったものです。「ディスカバー（DISCOVER）」は「発見」



を意味する英語で、「ディスカバー・ジャパン」は「日本を発見しよう」という意味です。団体旅行客などが利用する観光地はすでに多くあったのですが、さらに新しい「日本」を見つけようということです。ここには新しく個人旅行のお客を開拓しようとする国鉄のねらいがよくあらわれています。こうした流れに歩調をあわせるように若い女性向けの雑誌などが旅行情報をしばしば取り上げ、旅行ブームに拍車がかかったといわれます。「ディスカバー・ジャパン」に象徴される新しい動きは、1980年代に入るあたりに海外旅行でも生まれてきます。現在もよく売れている海外旅行者向けのガイドブックに『地球の歩き方』というシリーズがあります。このシリーズが最初に出されたのは1979（昭和54）年ですが、団体旅行でもなくパッケージ旅行でもない、「自分で歩く旅」を提案するというのが、出版社の説明です。このころから海外旅行でも、ケ. 旅行は各自が自分の好きな形を選ぶことのできる多様なものになってきたといえます。

いま世界では、旅行は大変なブームになっています。2010（平成22）年の今年、世界全体での海外旅行者の数がはじめて10億人をこえるという予測があります。世界の人口のほぼ6人に1人がこの一年間に海外旅行にでかける計算になります。大変な数の人びとが自分の国をでて、外国を訪問しているわけです。長い人類の歴史のなかで、これほど多くの人びとが地球の上を、しかも観光をおもな目的に行き来するというのは、ごく最近までなかったことです。これまでの世界では、人びとはそれぞれの国や地域で独自の文化を維持し、そのなかで生活してきました。もちろん、ときには外の国や地域から人がやってきて交流するということはあったはずですが、自分たちのものとは異なる文化を新しく生活に取り入れ自分たちのものにしていく、あるいは逆に外の人たちに自分たちのものを伝えるといったことは、日本だけでなくどこでも行われてきたことです。こうした文化やその交流をめぐる長い歴史のなかで、現在の世界的な旅行ブームはどのような意味をもつことになるのでしょうか。

現在の世界的な旅行ブームのなかで、多くの国々にとって観光は重要な収入源になっています。そのためコ. 各国の政府は、外国人観光客の獲得に必死になっていて、さまざまな工夫をして観光客を招き入れようとしています。また、旅行会社はさまざまな旅行を「商品」として売りに出しています。私たちは政府や旅行会社によって好奇心を刺激され、旅行にでかけることになります。政府や旅行会社が直接関係しない旅行でも、そうした動きに巻き込まれていないという保証はありません。旅行には、見る者と見られる者の関係があり、さらに見させようとする者がいるということはすでに見ました。いまは見させようとする旅行会社や各国の政府の影響力が大変大きくなっているということでしょうか。

見る者と見られる者の関係でいうと、見る者にとって旅行は、外の世界を知り知識を広めるきっかけにもなりますが、ときには誤った見方を相手に対して持ってしまうきっかけ

にもなります。サ. ガイドブックや書物によって外の世界を知ることでもあります、旅行した場合と同様に問題があります。一方見られることで、見られる者が自分たちの文化を再発見するということもあるでしょう。また、逆に見られる者にとって受け入れがたい見られ方をする場合もあります。海外では、日本といえば「フジヤマ、ゲイシャ」（富士山と芸者のこと）というイメージがいまだに残っているといわれています。シ. 見る側と見られる側、見る者と見られる者、どちらの立場に立っても旅行にはそうした課題がひそんでいるように思われます。

問1 空らん《 あ 》から《 え 》にあてはまるもっとも適当な語を答えなさい。

問2 下線部アについて。貴族や武士以外の人びとで、

(1) 朝廷や幕府の命令によって長い距離を移動した人びとの例

(2) 自らの意志で各地を移動した人びとの例

を、それぞれ一つずつ答えなさい。

問3 下線部イについて。下の図1、図2は別々の地域の名所図会です。このような名所図会を求めた人びとが持っていた関心はどのようなものですか。この二つの図の共通点に注意して説明しなさい。

図1 伊丹酒造 米あらいの図



図2 瀬戸陶器職場の図



問4 下線部ウについて。鈴木牧之の生まれた地域では雪国であることを背景とした産業があります。下の(あ)～(え)はそれを説明した文章ですが、内容に誤りのあるものが一つあります。それを選び、記号で答えなさい。

(あ) きれいな水や雪による湿気^{しっけ}を利用した織物業が昔からさかんである。

(い) 地元でとれる石油を燃やし冬でも水温を維持して鯉^{こい}の養殖業^{ようしよく}がさかんである。

(う) 豊富な雪どけ水と夏の高温を利用してブランド米の生産がさかんである。

(え) きれいな空気と雪どけ水と農村の労働力を利用して精密機械工業が進出した。

問5 下線部エについて。源蔵たちがまわった旅行経路上の町のいくつかを、以下のよう
に、^{もんぜんまち}門前町・^{しゆくばまち}宿場町・^{じようかまち}城下町の三つに分類しました。ただし、この分類のなかには
門前町・宿場町・城下町としてはあてはまらない町がそれぞれ一つずつあります。
それを選び、記号で答えなさい。

- (1) 門前町 [ア. 長野 イ. 成田 ウ. 琴平 エ. ^{あこう}赤穂 オ. ^{あつた}熱田]
(2) 宿場町 [ア. ^{かまくら}鎌倉 イ. ^{ぬまづ}沼津 ウ. 島田 エ. ^{くわな}桑名 オ. ^{なかつがわ}中津川]
(3) 城下町 [ア. ^{ひめじ}姫路 イ. ^{よしの}吉野 ウ. 上田 エ. ^{みと}水戸 オ. 和歌山]

問6 下線部オについて。政府が「見られる立場」を意識した背景には、当時の日本が抱
えていた問題がありました。政府は外国人からどのように見られれば、何の問題が
解決できると考えましたか、説明しなさい。

問7 下線部力について。当時の「見させようとする者の意図」は、どのようなものだ
ったのでしょうか、説明しなさい。

問8 下線部キについて。現在の私たちも、海外を旅行する場合には、政府が発行したパ
スポート（^{りょけん}旅券）が必要です。パスポートの「表紙の裏ページ」と「2ページ目」
は、それぞれ下のようになっています。

- (1) パスポートを発行する政府の役割を考えて、下の「表紙の裏ページ」の文章の
空らん< A >に入る語を答えなさい。
(2) パスポートにはほかにも役割があります。「2ページ目」の情報から、政府が
パスポートを発行する意図を答えなさい。

表紙の裏ページ

日本国民である本旅券の所持人を通路
故障なく旅行させ、かつ、同人に必要
なく A >を与えられるよう、関係
の諸官に^{ようせい}要請する。

日本国外務大臣（印）

2ページ目

旅券 PASSPORT

発行国 日本国 旅券番号 AZ1895323
姓 EBARA 名 SOROKU



国籍 JAPAN
生年月日 1842年3月10日
性別 男
本籍 TOKYO

所持人のサイン

江原素六

発行年月日 2010年2月1日

有効期間満了日 2020年2月1日

問9 下線部クについて。これ以外にパッケージ旅行には参加する観光客にとってどのよ
うな利点がありますか、一つ答えなさい。

問10 下線部ケについて。旅行の形が多様になった背景には第2次世界大戦が終わってか
ら現在までの社会の大きな変化がありました。そのなかには、

- (1) 「家族のあり方」の変化
(2) 「女性の生き方」の変化

もありました。それぞれの変化について説明しなさい。

問11 下線部コについて。各国政府は観光客を招き入れるために、宣伝・広告などさまざ
まな取り組みを行っています。その取り組みのなかで、旅行会社にはできないこと
を三つ答えなさい。

問12 下線部サについて。書物だけでは得られないものがあるため、人びとは旅行にでか
けます。書物では得られないものとはどのようなことですか、説明しなさい。

問13 下線部シについて。「見られる者」「見られる側」にも課題があるようです。観光に
訪れる外国人に誤解されることなく、自分たちの文化や生活を知ってもらうために
は、「見られる側」として「見る側」に、どのような観光計画を提示する必要がある
のでしょうか。それについて、君の「日本を知ってもらう観光計画」を考えなさい。
まず表題を書き、つぎに内容を120字以上140字以内で説明しなさい。ただし、句
読点も1字分とします。

〈問題はここで終わりです〉